

徳法寺

逃げられる場所

杉谷 浄

昨年、新宿・歌舞伎町の「TOHOビル」東側路地に集まる十代の若者たちが話題になっていました。通称「トー横」と呼ばれたこの場所に集まった「自分の居場所がない」子供たちは「トー横キッズ」と呼ばれ、朝まで路上で過ごしているというのです。これらの子供たちの中には、家庭で親から虐待を受けている子や、学校でいじめに会いながらも誰にも相談できずに悩んでいる子どもたちもいたとの事でした。本来、未成年者を守ってくれるはずの大人に不信感や警戒感を抱いてしまった子供たちが、家庭や学校から逃れ、同世代の同じような悩みを持った仲間を求めてここに集まっていたのです。

お金もないままに集まっていた子供たちの中には、売春によって食費を得る者も少なくなかったようです。そのような若者たちに食事を提供していたのが「歌舞伎町卍會」というグループでした。二十代から六十代の百七十人ものメンバーによつ

て組織されたこの会は、新宿区から許可を得て、街の清掃やホームレスへの炊き出しなどを行うボランティア団体でした。ところが、代表をつとめていた「ハウル」こと小川雅朝氏が、十六歳の少女を自宅に連れ込み淫らな行為をしたとして逮捕されたことで、この会は解散してしまいます。警察の一斉補導により、集まっていた子供たちも親元へ帰され、今では「トー横キッズ」の姿はありません。しかし、根本的な問題は何一つ解決していないのです。パートナーからの暴力から逃れるためのシェルターと呼ばれる避難所は行政によって用意されていますが、未成年者の場合、児童相談所が虐待を認めなければ、保護者である親から逃げるための場所は用意されていません。

今年の大河ドラマで、家康によつて三河の本證寺が攻められるという場面がありました。当時、一部の真宗寺院は、社会に居場所がなくなった人たちを受け入れ、境内に住まわせていました。中には「寺内町」と呼ばれるほどの規模になっていたところもあり、本證寺もその一つでした。これら本證寺を含む三河の真宗寺院「寺内町」に家康が攻め込んだのが「三河一揆」です。真宗は修行を必要としない宗派ですから、僧侶の修行場である寺院は必要ありません。実際、親鸞は寺院を建てませんでした。親鸞の死後、弟子たちは各地に寺院を建てるようになります。これらの寺院は、僧侶の為の修行場ではなく、門徒の聞法道場として建てられていったのです。真宗の教えは、すべ

ての人を必ず救うというものですから、いつの頃からか、真宗寺院は地域の人たちにとっての避難所となつていきました。戦国時代、家族を亡くした女子供から、娼婦や犯罪者にいたる、あらゆる行き場のない人たちが寺院の境内に住むようになり形成されていったのが、この「寺内町」だったのです。

今でも本證寺には、当時の内堀が残っています。しかし、一揆が鎮圧されて以降、全国の本宗寺院からこの様な機能は失われました。現在は福祉の主役が行政に移っていますが、逃げ場を求めている人たちがいる以上、真宗寺院にも何かできることがあるのでは、と考えさせられています。



本證寺の山門と堀に架けられた橋

死に様

杉谷伊吹

皆様こんにちは、如何お過ごしでしょうか。私は昨年から今年にかけて、今までにないほど多くの死別を経験しました。寂しく感じると共に、学びの場を重ねさせて頂いた事に感謝して過ごしております。そこで今回は、故人の生と死を見つめてきた中で考えたことを書いていこうと思います。

誰もが死に向かって生きています。そして、最後には様々な死に様を迎えるのです。故人の事を考えると心が苦しくなるようなものもあれば、羨ましく思えるようなものもありました。今のところ私の理想は、年老いて徐々に弱っていく、ついに朝目覚めなかったという形です。実際にそのような事はあるらしいのですが、結構奇跡的な状態と感じておりますので、さほど期待はしていません。寧ろ、相当苦しみを抜いて泡を吹きながら死ぬのだ、と自分に言い聞かせて日々構えて生きています。そのような死に様を私が想定している理由は、多少私のネガティブな思考性にも原因があるのですが、『末灯鈔』という親鸞の手紙に依るところもあるのです。

「なによりも、去年・今年と老少男女の多くの人々の死に遭いましたことこそ、寂しいことです。けれども、生死無常の道理は、すでに詳しく如来が説いておられることなのですから、改めて驚かされるには及びません。ともあれ、私、善信においては、

臨終の善し悪しを問うことはしません。信心の定まった人は、阿弥陀仏のお誓いを疑う心がないのですから、必ず往生する身と決まっています。だからこそ、愚かで無智な人も、何の心配もなく臨終を迎えることができるのです。」

—引用〈ラジオ放送「東本願寺の時間」から『末灯鈔』第六通の現代語訳部分のみ抜粋—

親鸞の正式名は善信房親鸞といます。ですから、この文章にある「善信」とは、親鸞の房号といわれる通称になります。この手紙は、八十八歳の親鸞が、災害によって多くの親族や仲間達を悲惨な状態で亡くした門弟たちに向けて送ったものです。ここでは、思い通りになることのない生死において、死に様がどのようなものであっても、念仏により問題なく往生するという事が説かれています。人間はどうしても死に様の良し悪しや、臨終時の苦楽に一喜一憂してしまいがちです。特に親鸞の時代は、その人の臨終の姿によって、浄土に行ったのか地獄に行ったのかが判断されていました。しかし、自分がどのような死に方をするのかは誰も分かりません。そこで、この時代には、自殺によって良い死に様になるようにする者さえいました。親鸞はそのような考え方を否定したのです。

自分と他人を比べることや、自分の思い通りにならないことで、悩み苦しむ人間の小さく浅ましい心すらも、そのまま肯定しているのが阿弥陀仏であるというのが親鸞の仏教です。立派な人間になって救われるのではなく、今の自分のままで救われるとい

う教えですから、安心して生きていけるのです。ですから私も、どのような死に方をするかという、選びようのない難題に対して、どう転んでも大丈夫であると、多少冷静に受け止めさせて頂けるのです。そこで、幾分悲観的な見積もりで考えておく方が、いざという時にがっかりしなくて良いかなと妄想している次第です。

しかしながら、そうは言ってもやはり死に様に関して無関心で居られないのが人の性です。特に、親しい人の死はずっと心に残り、時に延々と葛藤を繰り返してしまいます。亡くなった方の心の中までは結局分からないとしても、私の方が故人の思いを勝手に想像してしまうのです。個人的な事になります。私にとつて特に心残りであった故人は、死後かなり時間が経った状態で発見されました。

もし今、一人暮らしで特定の相手と頻りに連絡を取り合うことがない方が居られましたら、たまに私とメールやSNSで連絡し合いませんか？特に用事が無い時でも、お互いに言葉を交換しようという私の提案に興味をお持ちの方は、是非お声掛けくださいまし。



白山頂上で撮った写真。霧で少し先も見えないというのは、人生と同じである。

初めての子育てを振り返る

杉谷 ゆみ

二〇二一年十二月二十七日に女の子を出産し、瑠唯(るい)と名づけました。産後、激変した生活の中で、初めての子育てに奮闘しながら日々を過ごしております。今回は、この一年数ヶ月の子育てを振り返ってみようと思います。

退院して一ヶ月ほどの間は実家で過ごしました。瑠唯は両親にとって初孫でしたので、とても可愛がってくれました。退院したての頃の瑠唯は、夜なかなか寝てくれず泣いてばかりでしたので、母と交代しながらずっと抱っこしていました。自分が母親になり、あらためて親の有難さを痛感させられています。一ヶ月健診で体重測定をした時、瑠唯はギャン泣きしてしまいましたが、順調に成長していてくれたことに安堵しました。

実家から自宅に戻り、心配していた家事と育児の両立も、夫と協力することで何とかこなすことができました。三時間おきの授乳の時は、毎日寝不足状態でしたが、瑠唯がよく寝る子でしたので、日中、一緒に寝ていることもありました。おかげで瑠唯はすくすくと体重が増え、あつという間に生まれた頃の倍になりました。

生後五ヶ月で初めて十倍粥を少量あげたときも瑠唯は嫌がらずに食べてくれ、その後も毎日完食してくれました。母乳よりも食べることが好きで、大人が食べている物に興味を示すようになり、ス

イカにかぶりついていたのが印象に残っています。生後七、八ヶ月になると、嫌なことがあると泣きわめき、楽しいことがあるとニッコニコで笑ったりして、身体全体で感情を表現するようになりました。人見知りが強くなったのもこの頃です。新型コロナウイルスの感染状況が少し落ち着くと、こども広場や図書館に行くようになりました。同じような月齢の子を見ると、最初はじっとしていることが多かったのですが、慣れてくるとおもちゃで一緒に遊ぶようになりました。

生後九ヶ月の時、初めて瑠唯を連れて富山県の庄川温泉へ旅行に行きました。慣れない場所でも機嫌悪くならないか、夜は寝てくれるのかと不安でしたが、終始ご機嫌で楽しそうにハイハイで動き回り、旅館の方にも愛敬を振りまいていました。

生後十、十一ヶ月になるとつかまり立ち、つたい歩きするようになり、自分で動けるのが楽しくて実家で飼っている猫を追いかけて回すようになりました。テレビの音楽に合わせてリズムを取って動くようにもなり、将



来音楽好きになってくれたらなと思いました。

一歳の誕生日に手作りケーキを食べさせると、両手いっぱいにわしづかみして食べて、イチゴやバナナがすぐになくなりました。特に果物が大好きで見ると欲しがり、あげないと泣きます。まだ親の手を掴みながらですが、靴を履いて外で歩くようになり、道路の石や草を触ったり、公園で遊んだりしています。最近は嫌なことには泣きながら首を振り、思い通りにならないと駄々をこねるなど、子供らしくなっています。時々、夫の月忌参りに私と瑠唯も一緒に行かせていただいています。お経の間は父親の声に安心するのが大人しくしており、終わる頃には慣れて動き回っています。急に伺ったにも関わらず、ご門徒の方々に歓迎していただいたことを、この場を借りて感謝申し上げます。

一年数ヶ月を振り返ってみると、辛いことより楽しいことの方が多かったように思えます。瑠唯が居るだけで場が明るくなります。子育ては夫や義父母、両親、周りの助けがあるからこそできていると痛感しています。昨日できなかったことが今日できるようになる度に、子供の成長に喜びを感じています。四月から保育所に通うようになります。お友達と一緒に遊べるかな、お昼寝できるかなと心配ですが、子供同士で学んで身に付けることも多いと思います。これから色々な経験を通して、自分が好きなことを見つけて欲しいなと思っています。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺住職 杉谷淨

五月 鎌倉仏教 十四 一遍と時宗

六月 鎌倉仏教 十五 その他の鎌倉仏教の担い手と神道の芽生え

七月 室町時代 一 戦国武将の台頭と庶民の自立

時宗の祖とされる一遍は、その思想性や当時の社会に与えた影響力も他の祖師方に引けを取らないものであるにもかかわらず、時宗自体が急速に勢力を縮小させてしまったため、現在ではあまり取り上げられることが無くなりました。なぜこの時代に受け入れられたのかを探ります。

近年、祖師とされる方々以外の、この時代活躍した僧たちが注目されるようになりました。現在、祖師と仰ぐ教団がないことから、時代の脇役のように扱われてきましたが、実は親鸞や道元などより大きな影響力を持っていた、鎌倉仏教の担い手であったのです。また、神道が徐々に形成されてきたのも鎌倉時代でした。

七月には室町時代に入る予定です。この時期に、本願寺や日蓮教団、禅宗が一気に巨大化していきます。初回はその背景となる時代状況を探っていきます。参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。

徳法寺報恩講案内

六月十八日(日)

午後一時より 正信偈のお勤め

草四句目下「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

午後一時半より 法話 御手洗隆明氏

住職の大谷大学大学院での友人であり、分からないことを聞くとなんでも答えてくれる相談役でもあります。今春、京都国立博物館で行われた「親鸞展」の企画委員もなさっていました。

午後三時より 尺八演奏 山澤昭彦氏

山形県在住。尺八以外にもシンセサイザーの演奏をなさる方です。

2023年徳法寺報恩講のご案内

開催日 6月18日 日曜日

午後1時より 正信偈のお勤め
草四句目下「弥陀成仏のこのかたは」次第六首

午後1時半より 法話 御手洗 隆明氏
1964年大分県庄内町(現由布市)生まれ。本山の数学研究所で研究員をなさっています。専門は真宗とその歴史ですが、東日本大震災以降は、特に福島県の被災地に寄り添った活動をしておられます。日本宗教学会委員、宗教者災害支援連絡会世話人、京都国立博物館「親鸞展」企画委員。

午後3時より 尺八演奏 山澤 昭彦氏
山形県鶴岡市生まれ。尺八を学生時代に青木勝夫(二代青木勘麿)・横山勝也の各氏から学びました。プログラム音源を使って音楽を生成する「Generative Music」のアルバムを多数制作されています。近年はコンピュータを使った映像作品と生成音楽を組み合わせた「実験音楽工房展」を東京などで開催したほか、尺八古典曲の演奏や多ジャンルミュージシャンやダンサーとのコラボレーションなど、複合的なアート活動にも取り組んでおられます。

※今年通り、今年も社会福祉法人「Dびき」が、お茶・ワッペン・楽譜などの販売をいたします。

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>